

1543年のカール5世とヘンリ8世との対仏同盟交渉過程

高 梨 久美子*

The Negotiations for the Alliance against France between Charles V and Henry VIII in 1543

TAKANASHI Kumiko

abstract

This paper sheds light on the process of diplomatic negotiations between Charles V, the Emperor of the Holy Roman Empire, and Henry VIII through his ambassador. On 11 February 1543, the Treaty of closer friendship and alliance was concluded between Charles V and Henry VIII. Charles V sent letters to Chapuys, his resident ambassador in England, and emphasized his opinion on the articles of the treaty. He requested that there be no clause in the treaty referring to the Pope and that the treaty should defend the religious freedom of his subjects in England. The alliance between Charles V, the defender of Catholicism, and Henry VIII, who denied the papal authority was originally incompatible. Their hostility toward France, however, brought them together. Charles V, surrounded by anti-Habsburg countries led by France, needed support from elsewhere. For England, then at war with Scotland, it was necessary to form a common front against France, which had begun to aid Scotland. For both monarchs it was imperative to conclude their diplomatic alliance even if that entailed overriding their religious differences.

Key words : Charles V, Henry VIII, Chapuys, Treaty of closer friendship and alliance, diplomatic negotiations

1 はじめに

複雑な国家間争いが繰り広げられた16世紀、西ヨーロッパで国家間の外交による国際政治が出現⁽¹⁾、既に前世紀イタリアで始められていた駐在大使派遣の慣習が定着し始めた。神聖ローマ皇帝カール5世⁽²⁾が相続によって大帝国を形成するとその出現はフランス王フランソワ1世や教皇を刺激し、その結果としてカール5世は5度対フランス戦を行うこととなった。カール5世は先王アラゴンのフェルナンド2世からこの駐在大使のネットワークを引き継ぎ、情報収集や君主間の連絡に有効的なこのシステムの効率を大いに高めた。カール5世はこのように駐在大使を活用することにより、1530年代までに恐らくヨーロッパで最も情報通の君主になっていたのである。このルネサンス時代の外交研究はマッティンリー以来あまりなされておらず、カール5世の外交研究もブランディー、ルーニッツ、ブルン⁽³⁾らが行ってはいるがフランス、教皇庁、トルコ等に関心が集まり、イングランドとの外交関係はこれまで殆ど注目されてこなかった。イングランド側からはワーナム、スケアズブリック、マーホン⁽⁴⁾らがイングランド外交研究の中でカール5世との関係を部分的に扱っているにすぎず、カール5世側からはわずかにランデル、サルガード⁽⁵⁾がカール5世とイングランドとの関係の事実経過を簡潔に述べているだけで、カール5世の駐在大使を通してのイングランドとの交渉過程に関する研究はいまだ着手されていない。

キーワード：カール5世、ヘンリ8世、シャピュイ、親善友好同盟条約、外交交渉

*平成16年度生 比較社会文化学専攻

本稿ではヘンリ8世期イングランドに駐在したカール5世の大使シャピュイが主に関わった1543年の「親善友好同盟条約」（カール5世による第4回目の対フランス戦（1542年6月21日から1544年9月18日）に向けての同盟、以下対仏同盟と略す）締結交渉を史料から追ってみたい。そしてカール5世のシャピュイに対する指令と政策決定の事情及びイングランド側の事情を明らかにしたい。史料としては主にウィーンの王立文書館に残されていたスペイン側の史料を編纂したPascual de Gayangos, ed., *Calendar of Letters, Dispatches, and State Papers, relating to the negotiations between England and Spain*（以下 *Sp.cal.* と略す）, vol.6, part 1&2, London, 1895⁽⁶⁾と主にイギリスに残されておりイングランドに関わる史料を編纂したJames Gairdner & R.H. Brodie, ed., *Letters and Papers, Foreign and Domestic, of the Reign of Henry VIII*（以下 *L.&P.* と略す）, vols.16,17,18, part 1, London, 1898-1901（reprinted, 1965）を用いた。また今回用いた史料のオリジナルについてはKaiserlich und Königlich Haus-Hof- und Staats Arch., England, karten 9, fols.94-100 また British Library, Cott. Galba. B.X.137があり、必要に応じて利用した。この交渉過程で残された条約内容に関する文書は調査したところ6史料残存しているが、これまで言及・引用されているのは最後の史料一つだけである⁽⁷⁾。交渉順に挙げると①イングランドに於けるシャピュイとイングランド顧問官との交渉文書、②スペインに赴くイングランド大使とシャピュイとの条約交渉文書、③スペインでのカール5世宰相グランヴェルとイングランド大使ボナー及びサールビーとの交渉文書（1542年8月）、④と⑤カール5世の見解や指示が述べられたシャピュイ宛ての書簡二通、そしてイングランドに於けるシャピュイとイングランド側との最後の詰めの交渉を経た後の⑥シャピュイとイングランドとの条約の合意文書である。①から③の史料はイングランド側にしか残されていないが、これらの史料から1542年8月の時点でカール5世側の意図をイングランド側がどのように理解していたかを知ることが出来る。①ではスペイン側が交渉の初期段階から攻撃相手をフランスと定めていること⁽⁸⁾、②では攻撃と防衛の具体的条件につき条約の主要項目になっていく争点がここでほぼ出そろったこと⁽⁹⁾、③ではグランヴェルはイングランドに在住するカール5世臣民に関して信教の自由が守られることを最優先としているとイングランド側は理解していた⁽¹⁰⁾。以下ではその後の外交交渉の過程を、残る3史料とシャピュイからカール5世への書簡を基に探りたい。

2 1543年の対仏同盟締結に向けてのカール5世側の交渉

カール5世自身は条約締結に向けてどのような見解を示していたのか、それを見よう。

2-1 皇帝からシャピュイへの書簡（1542年8月12日付）⁽¹¹⁾

これはスペイン側に残されていた史料である。先に挙げた③文書と、どちらが先に書かれたかは明らかではない。この書簡は8月にスペインにきたイングランド大使への返答の趣旨をシャピュイに解説し、シャピュイによるイングランドでの交渉に資するようという意図であろう。しかしシャピュイがこの書簡をいつ受け取ったのかはわからない。

「余はイングランド大使たちへの今回の返答を余の最終決断とした。居住者と通商resident and commercial intercourseに関する条文章稿の問題点について。草稿は、外国人商人はイングランド内に住み自由に通商してよいが、その他通商せずに居住している外国人たちはイングランドの法に従うべしという。これは一種の差別である。イングランドに居住している余の臣下で商人でない者は、イングランドで今流布している新しい信仰や法⁽¹²⁾に従うことが明らかに求められている。余はこれを認めるわけにはいかない。・・・更にいかなる位階、身分、高位の聖職者であろうとも、あらゆる者に対する防衛同盟defensive league and alliance against all persons, ecclesiastics of whatever degree, quality or dignityという条文章稿の文言については、（ここに「聖職者」の語を入れると：筆者注記。以下同）イングランド王が聖職者全体を指すものとして捉え、現在の教皇をもその中に含めてしまうことは極めて明らかである。（この条文のままだと）古来の宗教を守る者たち（カトリック）からの苦情が来る。教皇自身が憤り、教皇と余との関係が悪化する⁽¹³⁾。教皇による対トルコ戦の援助にも影響する。更に教皇がフランス王と同盟関係に入る可能性がある。（ここでは）教皇自身の宗教的権威に関することにもふれられていない。イングランド王が（教皇の権威を）認めていないからである。この条項の文言が確定されれば共通の敵に対して武器を取ることであり、余も教皇に対し戦う必要が出てくる。余は断固反対する。こ

の条文をフランス王、その他全ての王、君主そして世俗諸侯に対する防衛同盟defensive league and alliance against the king of France,all other kings,princes and temporal lordsに変更すべきである。・・・反逆者や逃亡者の引渡しに関する条文を明記することをイングランド側は主張している。これではイングランド在住の外国人で新しい信仰や法に従わない者は反逆者とみなされ、国外追放となろう。カンブレの和約⁽¹⁴⁾で規定されている通り変更しないことを余は主張する。余は犯罪人引渡しを認めない。神と余の名誉と尊厳のために、宗教問題で屈服することは余は良心にかけてできない。・・・また余への反逆者であるクレヴ公やホルシュタイン公を反逆者として名指しすることを余は主張し⁽¹⁵⁾、両公に対する余の戦いにイングランド側が援助することを求める。・・・防衛すべき地域にスペインを含ませるべきである。・・・ネーデルラントとイングランドとの通商条約に関しては、イングランド側は1520年の通商条約（ブラバント・フランドル商人のみが関税を払い、イングランド商人はゼーラントの港の使用料を払うこと）に従うことを主張しているが、カンブレの和約で規定されている条項に従うように求む⁽¹⁶⁾。・・・対トルコ戦への援助を求む。・・・条約文に明記するイングランド王の称号に関するの不一致⁽¹⁷⁾は避けられるだろう。」

この史料を1で挙げた①から③の史料と比較すると、シャピュイとの交渉段階でイングランド側はカール5世側の意図をかなり正確に捉えていたようである。攻撃対象をフランスに限定しスペイン防衛を含め、通商や反逆者問題に関してカンブレの和約に従うこと、また対トルコ戦への援助をカール5世側が要求しているとイングランド側は理解していた。しかしクレヴ公らの問題にはイングランド側はふれてはいない。カール5世がイングランドに在住している彼の臣民全ての信教の自由を守ることを強調するのはグランヴェルと同じであるが、カール5世は特に教皇を条文の中でどう表記するのかを重視し、また宗教問題を条文に含むことを避けたいと思っていた。カール5世は「イングランド教会の首長」としてのイングランド王やイングランドの新しい宗教体制を認めていなかったけれども、ここでは条約文中でのイングランド王の称号表記に関する不一致を懸念してはいなかった。

2-2 シャピュイのイングランドとの交渉

ここで2-1の書簡が書かれた1542年8月から、カール5世の次の書簡が届く1543年2月までのシャピュイによるイングランド側との交渉を史料から再現してみたい。シャピュイはいち早くカール5世の回答を伝達したと見られる。9月9日シャピュイはネーデルラントからの特使ファレックスと共にイングランド王と交渉した。王はカール5世の書簡やカール5世のもとに派遣した大使からの報告書簡を見るまでは何もできないと回答した。10月17日シャピュイは枢密院議員たちと教皇に関する条項について、また10月21日には反逆者たちに関する条項について議論した。11月1日顧問官ガードナー邸で枢密院議員たちと議論し、防衛は聖職者を除く全ての俗人に対して行われること、聖職者の問題に関してはカール5世が示したままの文言で載せることをシャピュイは主張したが、拒否される。これまでの経過を見ていると、8月の皇帝書簡の趣旨に沿い、カール5世が特に反対した3条項（居住者と通商、反逆者と逃亡者、防衛に関する条項）のうちの2つが議論されていることから、おそらく10月17日の枢密院議員たちとの交渉時にはシャピュイは既に8月の皇帝の書簡を手に入れていたと思われる。11月21日から12月20日までは王や枢密院議員からは何も回答を得られなかった。12月21日シャピュイは首席秘書官ロツリーに部下を派遣するが、冷たい対応をされる。同日ウェストミンスター主教サールビーからフランス側の陰謀と対スコットランド戦の戦況について、この部下を通じて報告を受けた。しかし翌年、1543年1月16日枢密院議員の書記官がシャピュイ邸に来て、ネーデルラントが危機に瀕しており、すぐさま防衛手段を講じなければ壊滅のおそれがあるという情報を（イングランド）王が入手したと報告した。この頃ネーデルラントはクレヴ公による武力攻撃を受けており、ヘントとともにアントワープが占領されかけていた。

1月25日王の代理人達がシャピュイ邸を訪れ、かつてカール5世のもとに赴いた大使達に王が持参させた草稿をシャピュイと共に修正した。その結果カール5世が主張した以下の点が合意に達したとシャピュイは理解した。つまり、防衛同盟の条文から聖職者ecclesiastical personの語を除外しあらゆる敵all enemiesという語に変更すること、(同盟者に対する)反逆者としてクレヴ公やホルシュタイン公の名を明記すること、対トルコ戦援助問題を含めることである。「カール5世による同盟締結の許可がスペインから届くまで締結を待つべきだと王は主張しているのではないか」とシャピュイが聞くと王の代理人達は同盟締結を今自分達は願っていると返

答した。一転してイングランド側が同盟締結を非常に急いだことがわかる。これにはイングランド側のどのような状況の変化が影響していたのであろうか。この点については4でふれることにする。2月5日に王の代理人達がシャピュイ邸に来て、条約前文に載せる王の称号を「イングランド教会の首長」Sovereign Chief of the Anglican Church とすることを主張し、これに同意しなければ締結出来ないと言った。シャピュイは自分が署名するときは「イングランド王、フランス王、アイルランド王」King of England, France and Irelandという称号だけが文書に挿入されるべきであると主張した。しかし王の代理人達が既に署名し封印された、もう一通のイングランド側に残ることになる条約文書について、シャピュイは王の称号がどのように記載されていたのか、確認することはできなかった⁽¹⁸⁾。また代理人達は、条文に挙げられた反逆者の中にクレヴ公やホルシュタイン公を名指しすることをせず一般条項に含めることを主張し、シャピュイもこれを了解した。代理人たちはこの条約締結を秘密にするよう依頼し、またカール5世によってできるだけ早く批准されることを願った。シャピュイはイングランド側とこのような交渉を行い、それを詳しくカール5世に報告していた⁽¹⁹⁾。それに対する返答としてカール5世は1543年1月23日につぎのような書簡をシャピュイに送っている。

2-3 皇帝からシャピュイへの書簡（1543年1月23日付）⁽²⁰⁾

この書簡はスペイン側に残されていたものであり、イングランド側には残っていない。

「まず共通の防衛に関して「フランス王、他の全ての王、君主そして世俗諸侯に対する防衛同盟」という文言でなければ認めず。次に居住者と通商に関する条文草稿を断固として認めず。この二つは余の信仰と古来の宗教に密接に結びついており、余の名誉と尊厳をこの上なく損ねるものであるから絶対に譲歩できず。とはいえイングランド側との交渉を打ち切らず、時を稼ぎ余の提案した通りの文言を受け入れるようイングランド国王の交渉代理人を説得することをシャピュイに命じる。この二条項以外の承認に否やはない。シャピュイが説得できず、イングランド側がこの二条項に固執するなら、決裂を避けて時を稼ぎネーデルラント総督⁽²¹⁾や現在ドイツにいる宰相グランヴェルに指示を仰ぐべし。」

この書簡では第一に共同で防衛すべき相手は世俗君主に限ることと明記されており、教皇が関与する懸念を一切払拭することを主張している。第二に上記の問題と臣下の信教の自由に関わる二条項はカール5世自身の信仰とカトリック信仰全体に密接に結びつくのでシャピュイは絶対に譲歩しないようにと言っている。第三に前回の書簡でカール5世が主張している「反逆者達と逃亡者達に関する条項」や「クレヴ公やホルシュタイン公を敵として名指しする条項」は今回の書簡では主張されていない。第四にカール5世によるシャピュイへの命令はイングランド側との交渉を継続することで、イングランド側にこれ以外の条項を承認すると説明し、説得することを命じている。第一の防衛に関する条項に関しては1月25日の時点でイングランド側が譲歩していた。カール5世が他の条文を承認するという譲歩を示したのは、教皇が関与しないことを明確に示したい、そして臣下のカトリック信仰からの離反を阻止したいという宗教問題を第一に考慮しているからであろう。しかし書簡が届く⁽²²⁾までの通常の日数（3週間から2ヶ月）からすると、この書簡がシャピュイのもとに届いた頃にはイングランド側はここで述べられているカール5世の二つの主張を既に呑んでいたと考えられる。またシャピュイはこの書簡の内容を確認する前にイングランド側との同盟締結交渉を終えていたと考えられる。シャピュイはおそらくカール5世の先の書簡の中の優先順位で忖度して交渉したのであろう。では2月5日のシャピュイと王の代理人たちとの交渉の後、どのような文書が両者の間で作成されたのであろうか。2月11日にシャピュイたちは最終交渉に臨み、次のような合意がなされた。

3 イングランドに於けるヘンリ8世の代理人たちとシャピュイとの間の条約の合意文書（1543年2月11日付）⁽²³⁾

この史料はイングランド側に残されている史料であり、スペイン側には残っていない。イングランド側とシャピュイ両者の合意事項を記したイングランド側の文書である。ヘンリ8世自身の署名がなされている。合意内容をイングランド側が文書にし、ヘンリ8世自身の署名をつけてスペイン側へ送付したものの写しをイングランド側が残したと思われる。

「皇帝の国事評議会主任審査官ウスタッシュ・シャピュイ、法学者、とウィンチェスター主教スティープン（ガードナー）及びトマス・ロツリー（ヘンリ8世の二人の首席秘書官の一人）によるもの、ラテン語」と末尾に記入されている。また「カール5世の委員会が1543年5月2日バリャドリッドで、そしてヘンリ8世の委員会が1543年2月11日ロンドンでこの文書を引用した。」と後にこの史料を閲覧した者が書き加えている。

「最終的にヘンリ8世の代理人たちとシャピュイとの間で以下のように決定された。ヘンリ8世からカール5世へ（1543年2月11日）。ヘンリ8世とカール5世との間の条約交渉。（全部で25か条からなるが、ここでは一部を省略した。また条項番号は筆者が便宜上付したものである。）〔1〕以前の条約の違反に対する不満はここで確立された友情を損なうものである（以前のことは問わないこととしよう）〔2〕両国の教会及び俗界の臣下間の和平と自由な交流を促進する〔3〕両君主は相手方の君主に対するいかなる企てに対しても味方してはならない〔4〕そのように企てている敵に通行を許可してはならない〔5〕相手方の君主の反逆者や逃亡者を受け入れてはならない。要求がなされた時は一ヵ月以内に反逆者や逃亡者を引き渡さなければならない〔6〕もしイングランドとアイルランド、ワイト島、ジャージー島、ガーンジー島、マン島、ギヌ Guisnes もしくはカレーやベリックの町々や境界地域、もしくはスペイン、ブラバント、フランドル、ホラント、ゼーラント、エノー、アルトワ、ランブール、ルクセンブルク、ナミュール、フリースラント、デュレッセルの地域、ユトレヒト、メヘレンに対して侵略がなされた場合、侵略者やそれを支持する者は、共通の敵と見なされるべきである。またどちらの君主の臣下もそのような者と交際することを禁じられるべきである・・・〔11〕1520年4月11日の通商条約は1529年8月5日のカンブレの和約により確認されたものとして持続されるべきである⁽⁶⁾・・・〔13〕敵との休戦は相互の同意なしになされるべきではない〔14〕本条約の侵害となるため、今後どちらの君主もフランス王もしくは他のいかなる君主、権力者あるいは誰であれ他の人間と条約を結ぶべきではない。むしろこの条約はこれまで結んだいかなる条約にも優先するものである〔15〕この条約では（双方の）同意による以外誰も加えてはならない。またどちらの君主も他の条約で決められたからといって、もう一方の君主が敵意を抱き、論争を行ない、口論をするような人物、また相手に対し（何かを）要求する権利を持つような人物を自分の仲間としてはならない。・・・〔18〕両君主はトルコに情報を送ることをフランス王が控えるようにフランス王に要求すべきである⁽²⁴⁾・・・〔25〕この条約は要請を受けてから15日以内に両君主によって批准されるべきである。」

ここで今まで争点になっていた問題を取り上げてみたい。この合意文書の第2条では「通商」commercial intercourseの語が削除され「和平」や「交流」の語が入れている。イングランドに在住するカール5世の全臣民に対して信教の自由を守ることが意図されている。第5条の反逆者や逃亡者の条項が最終的に条文に含まれたのは、それが双方にとって有益であると判断されたからであろう。イングランド側はイングランドの法や宗教に従わない者がカール5世の領土に逃亡しないことを望んでおり、カール5世側としても自分の領土の反カトリック信者がイングランドに逃亡しないことを望んでいたために、結局、両者とも自己及び相手の宗教的立場を尊重する結果となっている。第14条「どちらの君主もフランス王もしくは他のいかなる君主、権力者あるいは誰であれ他の人間と条約を結ぶべきではない」neither prince shall treat with the French king, or with any other prince, potentate or person whatsoeverの条項では、聖職界ecclesiasticalや俗界temporalの語が含まれてはいない。カール5世にとってこれは教皇による同盟締結反対に対する弁解になりえる。またここには防衛相手に関する表現はなく、条約締結禁止という表現になっており、共同で防衛すべき領域を明記しているだけである。また第15条に於いては双方の同意による以外誰も同盟者に加えてはならないと記されている。対トルコ戦に関する援助問題はここには含まれてはいないが、フランスに対しトルコとの関係を控えるよう共同で要求する条文が含まれている。この最終合意書はカール5世側とイングランド側との妥協の産物であり、折衷であると考えられる。ここではまず第一にお互いの信教が尊重されており、第二に通商のみならず双方の自由な交流が望まれている。それは、宗派の違いを超えた交流が互いの経済活動には不可欠であるため、互いに譲歩したのであろう。通商条約またクレヴ公やホルシュタイン公を反逆者として名指しで明記することに関してはカール5世側がイングランド側に譲歩している。それはシャピュイが皇帝書簡からこれらの問題の優先順位は高くないと判断し、イングランド側に妥協したためであろう。

4 イングランド側の同盟締結理由

2-2で見たように1543年1月末からイングランド側はそれまでの交渉姿勢を急変させるのであるが、ここでイングランド側がカール5世との同盟締結を決意した理由を考えてみたい。宗教問題で反カトリックの姿勢を崩さず、称号問題等の同盟条件でもカール5世の要求には屈さなかったイングランドが、何故態度を一変させたのであろうか。その第一の理由はスコットランド問題であった。当時イングランドは対スコットランド戦の只中であって、対フランス戦に兵士を送れないこともあり、1542年12月までは本同盟締結に消極的であった。イングランドの顧問官の間ではノーフォーク公のようにフランスとの提携を望む意見すらあった⁽⁶⁵⁾。しかしスコットランドに対するフランスの援助を察知した後、スコットランド問題における情勢の変化を受けて、カール5世側との提携を支持する意見が主流を占めたようである⁽⁶⁶⁾。継続中の対スコットランド戦に於いて、フランスが1543年1月からスコットランドに援助を与え始めたという情報が契機となり、ヘンリ8世はフランスとの交戦を目的とする本同盟支持に動いたと考えられる。ジェイムズ5世の死（1542年12月）後ヘンリ8世はスコットランドを支配下に置くことを目指し、王太子エドワードと幼少のスコットランド女王メアリの結婚を画策している。またこの同盟締結はヘンリ8世の1510年代からのフランス領土獲得への意欲の延長線上にとらえることができる⁽⁶⁷⁾。対フランス戦終結のためカール5世とフランソワ1世とが締結した1544年9月19日のクレピーの和約以後もイングランドはフランス戦を続行し、1546年6月7日のアルドル条約でブローニュを8年間領有する承認をフランスから得ている。更にイングランド側が同盟締結を決意した第二の理由として、アントワープ市場へのイングランドの毛織物輸出を守るといった目的があったのではないだろうか。この1540年代初めアントワープ市場ではイングリッシュ・ブームが起こっており、イングランドの毛織物輸出が急増しつつあった事実は、背景として見逃すことができない。1543年1月フランス軍によってネーデルラントが壊滅的被害を受けようとしているという情報を受けた直後にイングランドは、カール5世との同盟締結へと急いでいる。また1542年5月のカール5世との同盟交渉の開始時、イングランド側は自国に不利なネーデルラント航海条例撤廃を交渉の第一条件にしていた。付け加えるなら1528年から1529年の対カール5世戦ではアントワープ市場の閉鎖を招いたというにがい事実があり⁽⁶⁸⁾、それはまだイングランドの人々の記憶に新しいはずであった。

シャピユイ自身は、1543年1月イングランドがカール5世との同盟締結へと急いだ理由について特に書簡の中では述べてはいない。しかしその時期のシャピユイの書簡にはイングランドの対スコットランド戦についての記述が非常に多く、イングランドがスコットランド問題にいかに専念していたかを示している。またヘンリ8世の代理人達からも、それまで王の顧問官たちがスコットランド問題にいかに忙殺されていたかを聞かされている。従ってシャピユイは対スコットランド戦に勝利することとヘンリ8世のスコットランド王位獲得に対する意欲をよく理解しており、同盟締結の好機と捉えていたようである。

5 おわりに

これまでカール5世側とイングランド側との対仏同盟交渉を史料の検討により見てきたが、この時期カール5世がイングランドに要求していたことが明らかになった。カール5世は何よりもまず同盟締結を求めている。カール5世は決裂を裂け、交渉を維持するよう何度もシャピユイに命じている。その理由は第一に対仏戦に向けて多くの同盟者（トルコ、クレヴ公、ホルシュタイン公、デンマーク、スウェーデン、プロシャ、スコットランド）を持つフランスに対抗するためであろう。今回の対フランス戦はカール5世にとって非常に厳しいものであり、カール5世にはイングランド王がフランス王と提携するのではないかという強い懸念があった。事実フランソワ1世はヘンリ8世にフランスの同盟に加盟するよう積極的に勧誘しており、カール5世もそれを承知していた。第二はアントワープ貿易維持のためであろう⁽⁶⁹⁾。通商の維持はカール5世にとって重大事であった。第三はネーデルラント防衛のためネーデルラント総督からの強い要請があったからであろう。それと同時にこの同盟締結にあたってカール5世が拘泥していたことも明らかになったと思われる。カール5世は交渉の最後まで教皇問題と臣下の信教の自由問題に固執していた。カール5世は教皇との関係を損なわないことをイングランド側に

要求し、またイングランド在住の臣下がカトリック信仰を維持し、それによってイングランドに於ける生活が損なわれないことを要求した。フランス軍による攻撃の被害の大きさを把握し、シャピュイからイングランド王の宗教問題に対する非妥協的態度の報告をも受けていたのであるが、カール5世はカトリックの擁護者またハプスブルク家の家長としての立場に苦しんでいた。教皇やカトリック世界からの反発は非常に大きな損失となり、この同盟締結は教皇からの支援を断念する覚悟を決めた上でのものであった。その上カール5世自身のカトリック信仰に反するという宗教的心情の問題もあった。しかし、結局はカトリックから離反したイングランドとの同盟締結の道を選ぶことになる。カール5世側がヘンリ8世の言うままに称号の表記を黙認していたことは特筆すべき事であろう。称号の不一致は同盟締結では極めて異例のことである。イングランド側がすでに封印し保管してしまった文書においてはイングランドがどのような称号を用いようともシャピュイには確認しようがなかったので、この同盟締結においては称号の表記問題は棚上げされた。今回の同盟は「教会の首長としてのイングランド王」の認可問題を棚上げしての締結であり、相手の宗教問題には深く立ち入らない外交である。カール5世はイングランドと対フランス問題でのみ提携したのであって、イングランドの新しい宗教体制を認可してはいないと表明している。これによりカール5世は教皇やカトリック世界へ弁解する口実を持つことが出来ると考えたのであろう。またイングランド側も「イングランド王、フランス王、アイルランド王」の称号しか認めないシャピュイに反対することなく同盟締結へと踏み切っていることは意味深い。

カール5世によるシャピュイを通してのイングランドとの同盟交渉は、教皇はじめカトリック勢力の意向に最大の配慮をし、臣民のカトリック信仰維持を強調しながら対仏戦に向けてイングランドと同盟を結ぶことを目指したものであった。自己の信条に反し、教皇の反発が当然予測される中での同盟締結はカール5世の苦渋の選択であったと思われるが、反ハプスブルク包囲陣に囲まれたカール5世がイングランドを唯一の同盟者として重視していたことを示している。イングランド側も特にスコットランド問題のためフランスと戦う必要があり、譲歩してでもカール5世と同盟を結ぶことが国益と考えたのであろう。16世紀前半の国際関係に於いて君主達にとって同盟を結ぶことがいかに必要であったかをよく示している。16世紀の国家は単独の個別領域としてよりシステムとして国際社会をなしており⁽³⁰⁾、両君主が同盟を結ぶことは、孤立を防ぐために必要なことであった。そこでカール5世もフランソワ1世もヘンリ8世と同盟を結ぶことに力を注いでいたのである。

イギリス近世史として見るとヘンリ8世の離婚問題で悪化したイングランドとスペインとの関係はこの同盟締結を機に修復され、その後また悪化しつつも外交関係が閉ざされることなく、やがてメアリ女王と王太子フェリペとの結婚を迎えることになる。イングランドとスペインやネーデルラントとの関係をより深く考察するため、カール5世またヘンリ8世と教皇との関係を探っていくべきであるが、それは今後の課題にしたい。

註

- (1) 近年の研究ではRichardson, G., *Renaissance Monarchy*, London, 2002; Doran, S. and Richardson, G., ed., *Tudor England and its neighbours*, Basingstoke, 2005.がある。
- (2) 本稿では慣例に従ってカール5世と表記したが彼は神聖ローマ帝国の君主であるとともに、ハプスブルク家の家長でスペイン王カルロス1世でもあった。なお本稿に引用された史料では皇帝と表記され、本稿もそれに従った。神聖ローマ皇帝としてカール5世は1529年にはスペイン、オーストリア、ネーデルラント、ナポリ、ミラノ、シチリア、サルディニア、新大陸アメリカ等を掌中に収めていた。しかしその帝国は普遍的かつ一体的なものではなく、多くの国家や領域がカールという一人の人物によって統合されていた。カール5世はまたキリスト教共同体の政治的守護者・カトリックの擁護者でもあった。この時期はオスマン帝国からの外圧を受け、帝国内ではプロテスタント勢力が力を強めていた。
- (3) Mattingly, G., *Renaissance Diplomacy*, New York, 1955; Brandi, K., *Kaiser Karl V. Werden und Schicksal einer Persönlichkeit und eines Weltreiches*, 2 Bde., München, 1937(1941); Lunitz, M., *Diplomatie und Diplomaten im 16. Jahrhundert*, Studien zu den ständigen Gesandten Kaiser Karls V. in Frankreich, Ph.D.diss., Konstanz Univ., 1987; Brun, M.A.O., *Historia de la Diplomacia Española*, vol.5, Madrid, 1999, pp.344-390.
- (4) Wernham, R.B., *Before the Armada, the Growth of English Foreign Policy, 1485-1588*, London, 1966; Scarisbrick, J.J., *Henry VIII*, London, 1968(reprinted, 1995); Mahon, L.M., *The Ambassador of Henry VIII*, Ph.D.diss., Univ. of Kent, 1999.
- (5) Lundell, R.E., *The Mask of Dissimulation: Eustache Chapuys and Early Modern Diplomatic Technique, 1536-1545*, Ph.D.diss.,

- Univ. of Illinois at Urbana-Champaign, 2001; Rodriguez-Salgado, M.J., Good Brothers and Perpetual Allies: Charles V and Henry VIII in Kohler, A., ed., *Karl V. 1500-1558*, Wien, 2002, pp.611-653.
- (6) 今回用いた史料のオリジナルは暗号文で書かれていることが多い。*Sp.cal.*の編者であるガヤンゴスP.de Gayangosはオリジナルを調査し、解読し、英語に翻訳して活字化した。
- (7) *L.&P.*, vol.17, no.144; British Library, Cott. Galba. B.X.137.この書簡の内容はLundellの論文の中に参考資料として載っている。Lundell, R.E., *op.cit.*, p.341.
- (8) *L.&P.*, vol.17, no.361, 1.8-1.10.
- (9) *L.&P.*, vol.17, no.446, 1.7-1.33. 1542年 7 月 3 日特使サルビーはスペインに向かった。
- (10) *L.&P.*, vol.17, no.608, 1.9-1.16.「グランヴェル」と史料に書かれている人物はフランシュ・コンテのグランヴェル領主ニコラ・ペルノー N. Perrenot (1486-1550) である。1530年スペインの首席顧問官になりネーデルラントと神聖ローマ帝国関係の問題を担当した。
- (11) *Sp.cal.*, vol.6, part 2, no.48.これは 前節でふれた史料④にあたる。
- (12) イングランドは 1534年の国王至上法でイングランド王は「イングランド教会の地上における唯一最高の首長」であると宣言し、正式にローマ・カトリックから離反してイングランド独自の宗教体制をした。また同年の王位継承法で新しい体制への服従宣誓を全臣下に要求し、宣誓拒否を大逆罪と規定した。
- (13) 教皇パウルス 3 世 (在位1534-1549) はカール 5 世が極めて苦手とした教皇であったといわれる。パウルス 3 世は前教皇たちと異なり、カール 5 世とフランソワ 1 世との争いに関わろうとはせず、両者を和解させようと努めた。1538年にはヘンリ 8 世を破門した。
- (14) カンブレの和約は1529年 8 月 5 日にカール 5 世の叔母マルガレーテとフランソワ 1 世の母ルイーゼの尽力で結ばれた。ブルゴーニュをフランスに残すことやフランス王子たちのスペインからの帰還、ミラノ、フランドル、アルトワの宗主権をカール 5 世に返却するなど多くの国際的ルールが定められた。この和約の第 3 条でイングランドもこの和約に加わることが記されている。J.du Mont, *Corps universel diplomatique du droit des gens*, vol.4, part 2, Amsterdam and Den Haag, 1726, pp.8-9.
- (15) 今回のカール 5 世の対仏戦は、カール 5 世に敵対しフランス王と同盟関係を結んでいるクレヴ公やホルシュタイン公に対する戦いでもあった。ヘンリ 8 世はクレヴ公の妹アン・オヴ・クレヴと1540年 1 月に結婚し、同年 7 月離婚していた。
- (16) カンブレの和約が結ばれた同じ日にネーデルラントとイングランドとの通商に関する和約が結ばれたがその内容は「皇帝の臣下達はイングランド内で自由に居住や通商ができる」というものであった。*L.&P.*, vol.4, part 3, nos.5829-5830 ; vol.16, no.1091.
- (17) ヘンリ 8 世の称号は1543年の法 (35 HenryVIII,c.3.) の制定により正式に「ヘンリ八世、神の加護により、イングランド、フランス、アイルランドの王、信仰の擁護者、イングランド教会およびアイルランド教会の地上における至上の長(首長)」と定められた。近藤和彦編『長い18世紀のイギリス その政治社会』山川出版社、2002年、28頁。この同盟交渉の結果を受けたあとに王の称号に関する法が制定されたことは興味深い。同盟締結交渉過程でイングランド王の称号問題が問題になったことと関係があるかもしれない。
- (18) *Sp.cal.*, vol.6, part 2, no.100.
- (19) *Sp.cal.*, vol.6, part 2, nos.41, 59, 74, 81, 94, 97, 101.
- (20) *Sp.cal.*, vol.6, part 2, no.98. これは 前節でふれた史料⑤にあたる。
- (21) ネーデルラント総督マリアMaria, reina de Hungria (1505-1558) はカール 5 世の妹で、1531年に兄カール 5 世に忠誠を誓い、ネーデルラントの統治権を委ねられた。
- (22) カール 5 世の時代には先帝マクシミリアン帝によって導入されたタクシス家の駅通制度が発達していた。カール 5 世とシャビュイとの間の書簡の交換は時には派遣された使者によることもあったが、この駅通制度が利用されることも多かったと考えられる。
- (23) *L.&P.*, vol.17, no.144; British Library, Cott. Galba.B.X.137. これは 前節でふれた史料⑥にあたる。*L.&P.*でのこの文書は全文が記されてはならず、省略も多い。
- (24) 篤信王の称号を持つフランス王は当時異教徒国トルコと密かに外交関係を結んでいた。1541年 7 月トルコ皇帝のもとに派遣されていたフランスの密使リコンがイタリアでスペイン軍の兵士に殺害された。この殺害をフランソワ 1 世は今回の戦争理由に掲げた。
- (25) *L.&P.*, vol.16, no.1090.
- (26) ジェイムズ 5 世の死後スコットランド王妃の父にあたるギーズ公が大使としてスコットランドに向ったなどフランソワ 1 世がスコットランドへの援助を始めたという情報がイングランド側に伝わった。*L.&P.*, vol.18, nos.40, 46, 47, 57.またS.アダムスもスコットランド問題を同盟締結理由に挙げている。P.コリンソン編・井内太郎監訳『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 6 1485-1603』慶應義塾大学出版会、2010年、264-266頁。筆者は年代記も含めて当時のイングランド側の史料に当たったのであるが、スコットランド問題とアントワープ市場問題以外に明確なる同盟締結理由を探ることはできなかった。またここで挙げた王太子エドワードとスコットランドの幼少の女王メアリの結婚問題は1543年 7 月のグリニッジ条約により同盟締結されたが、後にスコットランド側により破棄された。
- (27) P.コリンソン編・井内太郎監訳、前掲書、260頁、296頁。1544年 9 月カール 5 世は密かにフランソワ 1 世とクレビーの和約を結びブルゴーニュ占領途上のヘンリ 8 世を裏切るが、ヘンリ 8 世も1546年フランソワ 1 世とアルドル条約を結び、両国間に和平が実現した。
- (28) ネーデルラントの航海条例撤廃に関しては*Sp.cal.*, vol.6, part 2, no.30. アントワープ市場におけるイングリッシュ・ブームに関しては井内太郎『16世紀イングランド行財政史研究』広島大学出版会、2006年、284-289頁参照。アントワープ市場の閉鎖に関しては今井宏編

『イギリス史 近世』山川出版社、1990年、30頁参照。

- (29) ブランディーは「カール5世が同盟を結んだ最大の目的はネーデルラント貿易維持」と言い、「カール5世の宰相グランヴェルがネーデルラント貿易やイングランドとの関係の重要性を進言した」と述べている。Brandi, K., *op.cit.*, pp.409-414.
- (30) 近藤和彦編『岩波講座世界歴史16 主権国家と啓蒙』岩波書店、1999年、5頁、43-48頁参照。